【セミナー抄録】

## 1.「人間生活に忍び寄る“新型”高病原性鳥インフルエンザ」

**齊藤　慶輔（猛禽類医学研究所代表）**

近年、野鳥の高病原性鳥インフルエンザウィルス(HPAIV)感染症が全国で多発している。2010 年～2011 年冬に感染が確認された野鳥は、水禽類 11 種、猛禽類 3 種、そしてツル類の計 61 羽に上った。北海道では、2011 年 1 月下旬より道東を中心にオオハクチョウ等の衰弱個体や死体が発見され、4 月までに 45 羽の野鳥が収容された。遺伝子検査の結果、10 羽の水鳥から HPAIV（H5N1）が検出されたが、家禽等で用いられている複数の A 型インフルエンザウイルス（IV）のイムノクロマト法の簡易検査キットでは陰性を示した感染例が確認されるなど、収容個体の取り扱いに混乱をきたした。また、2022 年初頭より北海道においてカラス類や大型猛禽類の HPAIV 感染症が多発した。生体収容され感染が確認されたオジロワシ 10 羽について、ヒト用の抗 IV 薬であるバロキサビル マルボキシルを経口投与し、7 羽の治療に成功した。以降も本症は発生しており、2026 年 9 月時点で生体収容されたオジロワシ 14 羽中 10 羽が治癒し（2 羽放鳥）、オオワシ 1 羽（放鳥）、タンチョウ 1 羽、クマタカ 1 羽の治療に成功している。2025 年には北海道東部において HPAIV 感染症によって死亡した海鳥類が多数収容されたが、同時にゼニガタアザラシとラッコにおいて複数例の感染個体が確認された。哺乳類での HPAIV 感染は道内ではキタキツネとエゾタヌキにおいて確認されている。2024 年には米国の乳牛において HPAIV の感染が確認され、感染が疑われるウシと接触したヒトへの感染が確認されたが、結膜炎とみられる症状が著しいため搾乳などの際に牛乳の飛沫を介して感染した可能性が示唆されている。2026 年にはオランダの農場においても乳牛から HPAIV に対する抗体をもつ乳牛が確認されており、乳牛が数多く飼育され、野生動物と接触する機会の多い北海道などでも同症が発生する可能性がある。ヒトへの HPAIV（H5N1）感染例は 2003 年以降、東南アジアや中東を中心に世界各地で確認されているが、多くの患者が直接的または間接的に家禽との接触していたことが報告されており、今後野生のカモ等のジビエを介した本症の感染も懸念される。日本においてはヒトでの発症例やヒトからヒトへの感染は確認されていない。WHO によると HPAIV（H5N1）のヒトへの感染は 2003 年から 2024 年 4 月までに 889 例確認され、致命率は約 52%（463 例）であったとされている。2025～2026 年シーズンに確認された HPAIV に感染した野鳥のうち、道内では 112 例中 90 例（80%）をカラス類が占め、水鳥類が中心であった本症の感染は、人間の生活圏の近傍に生息する種へと重心を移している。さらに PCR 検査で陰性を示したにも関わらず、中和抗体価が高値を示す野生猛禽類が複数確認されており、死亡例を中心とする現行の行政サーベイランスでは捉えきれない規模で感染が潜在・循環している可能性が示唆される。一般市民に対する行政の呼びかけは「死亡野鳥に素手で触らない」、「多数の死亡が確認された時に通報する」に留まっており、衰弱個体への収容対応が確立されていない。結果として市民が HPAIV に感染した野鳥の保護収容に関与する事例が生じているほか、放置された個体は捕食者を介した感染拡大の起点にもなりうる。HPAIV 感染により衰弱・死亡した野生動物をイヌ

やネコなどが接触するリスクもあり、飼い主が感染した愛玩個体を一般の動物病院に持ち込むことにより、院内での感染拡大や医療従事者等への感染が懸念される。本来鳥類の疾病であった HPAIV 感染症は、哺乳類にもより容易に感染するように変異した“新型”高病原性鳥インフルエンザになりつつある。ワンヘルスの観点から人間、動物、自然環境を連携させてモニタリングし、各分野からの対応策を予め検討しておく必要がある。

**2.「医療・福祉分野で活躍する犬　介助犬・補助犬と動物介在療法🐾」**
**高柳　友子（社会福祉法人日本介助犬協会　理事長）**

犬は人類の最も古い伴侶動物として共に生活してきた動物といえる。人は犬の世話を規則正しくすることで生活リズムを守り、愛情を注ぎ、笑顔を向け、温かく柔らかいその身体に触れ、甘えてもらうことで自尊心を構築し、多くの言葉を発する。犬を通じて、他者と関わり、犬を話題に楽しい会話に花を咲かせることが出来る。

犬は、人類が伴侶動物として造った家畜動物の一種であり、野生動物と異なり　ワクチンや予防薬、検査等の獣医医療が公衆衛生学的に確立した動物で、行動学も確立しており、飼い主がしっかり学習することできちんと信頼関係を築くことで、行動管理も適切に行うことが出来る、唯一の動物といえる。

そんな犬だからこそ、障害や病気、困難に立ち向かうストレス下にある人を笑顔に元気にすることが出来る。

視覚障害者の盲導犬は名称こそ認知されているが、聴覚障害者の聴導犬、肢体不自由者の介助犬も　盲導犬同様、障害者の自立と社会参加を支える大切な自立手段の選択肢である。

また、病院での辛い治療やリハビリ、検査の途上で子ども達に限らず全ての患者さんにとって、補助療法としての動物介在療法が導入されることは大きな支えやモティベーションとなる。

我々医療従事者にとって、困難を抱えた患者さんが、笑顔になる、前を向くモティベーションになる選択肢に　犬🐾　という存在があることを紹介できればと思う。

**3.「ワンヘルスアプローチによる AMR 対策」**
**臼井　優（酪農学園大学　獣医学群　獣医学類衛生・環境学分野食品衛生学ユニット教授）**

畜産・伴侶動物での薬剤耐性菌の現状と抗菌薬使用の影響、ハエや堆肥など環境を介した伝播経路をワンヘルスの視点から紹介する。薬剤耐性菌の分野間伝播は頻繁ではないが、一度起きるとヒト間で拡大しうるため注意が必要であり、モニタリングや代替法など今後の対策の方向性を示す。